

都留文科大学電子紀要の著作権について

都留文科大学電子紀要のすべては著作権法及び国際条約によって保護されています。

著作権者

- 「都留文科大学研究紀要」は都留文科大学が発行した論文集です。
- 論文の著作権は各論文の著者が保有します。
- 紀要本文に関して附属図書館は何ら著作権をもっておりません。

論文の引用について

- 論文を引用するときは、著作権法に基づく引用の目的・形式で行ってください。

著作権、その他詳細のお問い合わせは

都留文科大学附属図書館
住所: 402山梨県都留市田原三丁目8番1号
電話: 0554-43-4341(代)
FAX: 0554-43-9844
E-Mail: library@tsuru.ac.jp

までお願いします。

[電子紀要トップへ](#)

山部赤人歌の「春菜」

The Spring Greens of Yamabeno Akahito's Tanka

鈴木武晴

SUZUKI Takeharu

一 花の共演

(一四二七)

日本最初の抒情歌集『万葉集』には、花の歌が数多く咲いている。その中から小稿が取り挙げるのは、次の一群である。

山部宿 赤人が歌四首

春の野にすみれ摘みにと来し吾ぞ野をなつかしみ一夜寝にける
(八四四)

あしひきの山桜花日並べてかく咲きたらば甚恋ひめやも
(一四二五)

吾が背子に見せむと思ひし梅の花それとも見えず雪の降れば
(一四二六)

明日よりは春菜摘まむと標めし野に昨日も今日も雪は降りつつ

この四首は、山部赤人が柿本人麻呂の4四九六〜九の構成（伊藤博『萬葉集釋注』）や、柿本朝臣人麻呂歌集所出四首歌群の7二二四七〜五〇・10三三二丁五の構成（特に後者）・発想・語句を踏まえて詠み成した作品である（拙稿「大伴家持の越中秀吟」、都留文科大学研究紀要50集、一九九九年三月）。前二首（一四二四、一四二五）が男性の立場で春を讃え、後二首（一四二六、一四二七）が女性の立場で春を嘆息し（新潮日本古典集成『萬葉集』、一九七八年十一月、上掲拙稿）、春に寄せる人間の普遍的心を四首に咲かせた作品である（拙著『テーマ別万葉集』、二〇〇二年二月）。

第四首一四二七の「春菜」については、単に食用にする草の総称と捉えられているに過ぎなかった。事実、集中には巻十の小題「草

に寄する」のもとに「春菜」を詠んだ一九一九の歌が収録されている。しかし、前掲拙稿において次の三つの事柄を勘案して、一四二七の「春菜」の場合は、その咲く花を意識して用いられたものであると説いた。

- 1、前三首（一四二四、六）が、それぞれ一首ずつ具体的な花を詠んでいる。
- 2、第四首一四二七は、菜の一種の「すみれ」の花を詠んだ歌と認められる第一首一四二四と、発想・語句の面で響き合っている。

3、巻十七所収の大伴家持と大伴池主の贈答歌において、家持が赤人の第四首一四二七を踏まえて「娘子らが春菜摘ますと」（三九六九）と詠み、それをうけて池主は赤人の第一首一四二四を踏まえて「春の野にすみれを摘むと」（三九七三）と対応させている。

右の第3点について補足したい。家持歌一三九六九は、天平十九年（七四七）の上巳（三月三日）の歌で、「春菜」は、

…春花の咲ける盛りに 思ふどち手折りかざさず 春の野の茂み飛び濺ぐ うぐひすの声だに聞かず 娘子らが春菜摘ますと 紅の赤裳の裾の 春雨下にほひひひちて 通ふらむ時の盛りを

という春たけなわの頃の情景を艶麗に想い描いた文脈の中に用いられている。「春菜」は花盛りの「春花」に対応しており、花の咲く盛りの状態を念頭に置いて詠まれたものと察せられるのである。この「春菜」は、「春雨」の降る中で咲いている。集中の、春雨の中

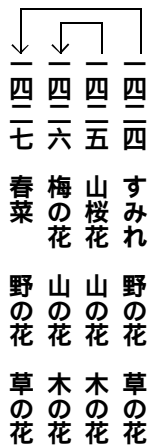
で花咲く菜を詠んだ次の歌も参照される。

山振の咲きたる野辺のつほすみれこの春雨に盛りなりけり

(八一四四)

こつしてみると、家持歌の花咲く盛りの「春菜」に池主が赤人の一四二四を踏まえて花咲く「すみれ」を対応させたのも得心できるのである。

1〜3の事柄に基づいて前掲拙稿は、一四二四〜七の四首を次のような内実をもった構造体と捉えた。「山桜花」と「梅の花」とが「木の花」であることについては、『釋注』に触れられている。



これは四首一組の形で複数の花を詠んだめずらしい事例である。けれども、第四首一四二七の「春菜」の花の実態については詳らがでなく、前掲拙稿においては「菜の花の類」と記すにとどめた。その後、考察を深め、一案を得るに至った。その一案は、前掲拙著『テーマ別万葉集』の脚注の「考」に記したが、意を尽くしていない。よって、小稿に詳述する次第。

二 赤人歌の「春菜」

叙上のように、赤人の四首は、前三首一四二四〜六が順に「すみ

れ「山桜花」「梅の花」という固有の花を詠んでおり、第四首一四二七の「春菜」は第一首一四二四の「すみれ」と対応している。してみると、一四二七の「春菜」を菜の総称と捉えるのは不十分であると言つことが許されよう。赤人は「春菜」に複数の菜を考慮しつつも、具体的な特定の菜のその花への思いをこめたのではないかと考えられる。「春菜」は一般的には総称としての普通名詞と捉えられるが、ここはある特定の菜を表わす固有名詞と同等の機能を賦与されていると考えられるのである。

こつして、一四二七の「春菜」の花の実態に考察の手を及ぼすことが許されよう。

まず、一四二七の「春菜」が一四二四の「すみれ」に対応している点に留意すると、「春菜」は「すみれ」の花と同じ時期に群生し、その花は「すみれ」の花と同様、可憐な小さい花であったと考えられる。

次に、「春菜」を詠む一四二七とともに女性の立場にたつての一四二六が、白梅花が雪にまがうことを嘆いた歌である点に留意すると、一四二七の降雪に因つて摘めない春菜の花は、一四二六の白梅と同様、白雪に包まれてしまつような白く清楚な花であつたと思われる。

前掲拙稿では、一四二五の「山桜花」と一四二六の「梅の花」の対応には紅と白の花の色の対応があることを証明し、一四二四の「すみれ」と一四二七の「春菜」の対応にも、「春菜」の実態がつかめないのに具体的に指摘しがたいけれども花の色の対比があると思われるべきであろうと述べた。この点については、上述の考察によつて、赤人には一四二四の「すみれ」の紫紅色と一四二七の「春菜」の白

の色彩対比の意図があつたと言えよう。四首全体では、次のような花の色の照応と対比とが存すると思われる。

一四二四 すみれ 紫紅色

一四二五 山桜花 紅色

一四二六 梅の花 白色

一四二七 春菜 白色

「すみれ」の紫紅色も「山桜花」の紅色も、その濃淡の度合いについては明確ではないけれども、四首は基本的には前半二首の紅系と後半二首の白の対比と言えよう。

「すみれ」と同じ時期に野に群生し花を咲かす菜で、その花は雪の白に包まれてしまつような白い花。ということになると、すぐさま想起されるのは、薺(なづな)の花である。一四二七の「春菜」は「なづな」の映像を強く喚起するのである。

この見方によつて、後世の例であるけれども、平安中期の歌人曾禰好忠の『好忠集』に、

にはのおもになづなのはのちりばへばはるまできえぬゆきが
とぞみる(三七七)

と詠まれていることが参考になる(本文は『新編国歌大観』による。以下、平安以降の歌集の本文は、『古今和歌集』を除いて、同書による)。なづなの群生の、可憐な小さな白い花の散りほう景は、雪がつつすらと消え残っている景を想わせる。曾禰好忠の歌は、なづなの花の清らかな白の景を捉えた印象歌である。

「なづな」は中国渡来の植物で、中国では「薺」。唐の歐陽詢

撰の『藝文類聚』を検すると、その巻八十二「草部下」の「薺」の項に、「説文曰薺草可食也」とある（本文は中文出版社『藝文類聚』による）。

「なづな」は春の七草の一つで、邪気を払う食用の菜として尊重されてきた植物である。七草摘みの行事も古代中国にその淵源があるらしい。梁の宗懐撰の『荆楚歲時記』に「正月七日を人日と為す。七種の菜を以て羹を為る。」とあることが知られている（本文は守屋美都雄訳注の『東洋文庫本』による）。

日本の文献では、平安前期の『新撰字鏡』に「薺 奈豆奈」と見え、平安中期の『延喜式』を検すると、その巻三十九「内膳司」の「供奉雜菜」の項に、「薺ナツナ四升ナツナ」とあるのを見出すことができる（本文は、国史大系本による。「正二十二月」は「正月二十二月」の意）。また、長保二（一〇〇〇）年頃の成立と覚しき『枕草子』にも、第六十三の「草は」の章段に取り挙げられている。和歌では、平安末から鎌倉初期に生きた慈円の家集『拾玉集』に、

けふぞかしなづなはこへらせりつみてはやなくさのおもものま
らむ（二三〇〇）

と歌われ、南北朝時代の『三百六十首和歌』にも、慈円の

七草の名はなづなはこへらせりつみてはやなくさのおもものま

（八）

が収められている。また、室町中期の類題歌集『題林愚抄』には、

しばふなるなづなをさへにつみ入れて袖まであをき春の里人

（三四八）

という藤原為重の作がある。

こうしてみると、「なづな」は、遡って万葉の時代にも食用の菜として尊重されていた可能性が高い。しかし、「なづな」が食用として用いられていたとしても、それは右の第三歌例からも知られるように、花の咲く前の若葉であろう。地面にそって八方に丸く広がる羽形の葉であろう。気候が暖かくなって薑とうが立ち花をつけるようになってからでは食用にできないこと、先掲『好志集』の

三月をはり（十首のうち第二首）

みそのふのなづなのくきもたちにつけりけさのあさなに何をつま
まし（八四）

の歌が告げている。しからば、「なづな」の花の映像を強く喚起する赤人歌一四二七の「春菜」は、何のために摘まれるものであったのか。

赤人の四首の内側二首には觀賞するための桜と梅とが詠まれている。それゆえ、外側二首の「すみれ」と「春菜」も、その花を觀賞する意図があったと思われる。

また、「なづな」も、「すみれ」も、平安初期の薬物書『本草和名』（第十八巻）にその名が確認でき、「なづな」は、太陽暦の三月から五月にかけての花実期には、地上部を採集し、洗って乾燥させ、刻

んで薬用とすることが可能であることが知られている。「すみれ」の花も同様に全草を摘んで乾燥させ薬用に供せられる。

一四二四の「すみれ」の花も一四二七の「春菜」の花も、觀賞用であると同時に、上述のような実用のために摘まれるものであっただろう。この見方にとって、一四二七と同じく野草の「紫」の「標野」を詠んだ額田王の

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る(1二〇)

の歌が、五月五日の薬狩りの折りの歌であることも参考になる。

三 赤人の四首の文学史的意義

以上、赤人の四首一四二四〜七の歌について、特に一四二七の「春菜」をめぐって考察してきた。

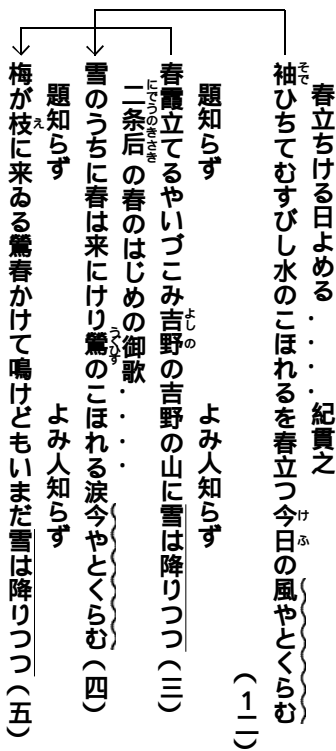
赤人の四首は、先述のように家持と池主が歌を詠み交わす際に強く意識され(17三九六七、三九六九、三九七〇、三九七三など)。「春菜」の歌一四二七は三九六九に影を落としている(その文学的体験を基に、家持は越中秀吟(19四一三九〜五〇)の一四一五〇に上巳の宴歌四一五〜三の三首を有機的に結び合わせる際に、赤人の四首の構成と表現とを強く意識したと考えられる)以上、拙稿「大伴家持の越中秀吟」、都留文科大学大学院紀要第二集、一九九八年三月)。

赤人の四首詠中の歌は、『古今和歌集』の作品にも影を色濃く落としていると思われる。

仁和帝、親王におましましける時に、人に若菜たまひける御歌
君がため春の野に出でて若菜摘むわが衣手に雪は降りつつ
(1二二)

巻一「春歌上」に収録されている右の歌(本文は小町谷照彦訳注旺文社文庫本による)は、赤人の一四二七と同じく若菜摘みを詠み(ただし、その内実は異なる)、結句「雪は降りつつ」が共通する。よって、作者の念頭に赤人歌一四二七が存したと見られる。

「雪は降りつつ」の表現及び歌い収めは、赤人歌一四二七を嚆矢とする。この表現で歌い収める歌は万葉集に全五首、一四二七の影響をうけて5八三三、10一八三三、18四〇七九、19四二八三に用いられている(前掲拙著)。そしてさらに『古今集』に継承され、先掲巻一の二番歌の他に、三番歌や五番歌にも用いられている。ちなみに、この二首は次のような二首ずつの四首対応構成を持つと考えられる一群において、発想・語句の面で響き合っていると見えよう。



また、このような四首構成と見ることが許されるならば、その構成者は二番歌の作者で、『古今集』撰者である紀貫之であると推察される。この推察にとつて、貫之が仮名序において赤人を、

歌にあやしく妙なりけり。人まろは赤人が上に立たむことかく、赤人は人まろが下に立たむことかたくなむありける。

と高く讃えていることも顧慮される。

右の仮名序の部分の下には古注があり、赤人の代表作として一四二四が引用されている。この一四二四は、『古今集』巻二「春歌下」の素性の歌、

思ふどち春の山辺にうちむれてそのとも言はぬ旅寝してしが

(一一六)

を考慮すると、平安びとに憧憬を抱かせる歌であつたと思われる(前掲拙著『テーマ別万葉集』)。

赤人の一四二四、七の四首構成の内実については第一節に示したが、木の花・草の花の認識による歌群構成は、万葉集他の歌群構成に深く影を落としていること、前掲拙稿に指摘した。他の歌群とつのは、具体的には巻八「夏相聞」部の二五〇七、一〇、巻十「夏雑歌」部の「花を詠む」歌群(一九六六、七五)、同巻「夏相聞」部の「花に寄す」歌群(一九八七、九三)、そして大伴家持の越中秀吟(一九四二、三九、五〇)の植物の歌四二二九、四〇(桃李の花)

に対する四一四三(堅香子草の花)の例などである。

家持は最愛の弟書持の死を悼んだ「長逝せる弟を哀傷しぶる歌」(一七三九五七、九)の長歌三九五七の「花薫る庭」の表現に、植物を愛した優しい心の持ち主であつた書持への思いをこめて、「この人ひととなり、花草花樹を好愛でて、多に寝院の庭に植糸たり。」と注している。この「花草花樹」は、花の咲く草、花の咲く樹の意で、草の花、木の花の認識が存したことを物語る重要な表現である(前掲拙著)。

木の花、草の花の認識は平安時代の作品にも見られる。『古今集』巻十の「物名」の部の植物題の歌は、主に木と草の観点から、四二六、四三五、四三六、四四四、四四五、四五三、四五四、四五の四つの歌群から成ると思われるが、たとえば群には、木の花の「さうび」(四三六)に対して草の花の「をみなへし」(四三七)、九、「きちかうの花」(四四〇)、「しをに」(四四一)、今の紫苑、「けにじ」(四四四)、今の朝顔(が並んでおり、木の花、草の花の認識による作品構成が見て取れる)。

木の花、草の花の認識は、清少納言の『枕草子』に、次のように明るく語られている(本文は石田穰二訳注角川文庫本による)。

・木の花は 濃きも薄きも、紅梅。桜は、花びら大きに、葉の色濃きが、枝細くて咲きたる。藤の花は、しなひ長く、色濃く咲きたる、いとめでたし。……(三十四段)

・草の花は 撫子、唐のはさらなり、大和のも、いとめでたし。
女郎花。桔梗。朝顔。刈萱。菊。壺すみれ。

竜胆は、枝ざしなどもむつかしけれど、異花どもの皆霜枯れたるに、いと花やかなる色あひにてさし出でたる、いとをかし。……（六十四段）

以上、平安時代の文学作品の一端を見たけれども、そこに表わされる木の花・草の花の美意識の源流は万葉集にあり、就中、山部赤人の四首はその普遍的美意識を象徴する貴重な歌群と思われる。

（二〇〇一年 平成十三 五月十八日稿）